

## 緑の灯火と黄金の輝き ——*The Great Gatsby*における貨幣とアメリカの夢——

宮 本 文

### Summary

The purpose of this paper is to clarify the relationship between love and money in the context of the American Dream in F. Scott. Fitzgerald's *The Great Gatsby*. In general, those who try to buy or sell love tend to be punished in the end in American novels, such as Kate Croy in *The Wings of the Dove*, Lily Bart in *The House of Mirth* and Carrie Meeber in *Sister Carrie*. However, love and money in *The Great Gatsby* are closely related with each other in terms of the concept of the self-made man who pursues success in both love and money. By employing the concepts used in the money system as metaphors such as convertible paper money, inconvertible paper money and trust, I examine how Gatsby's love for Daisy is harmonized with his money-making and how the process of his money-making equals that of making his "self."

In the end, Gatsby is killed and his American dream seems to fail. However, this is neither his failure nor a punishment for Gatsby as the system of the American Dream requires some kind of difference to maintain itself: we gain profit from difference but difference vanishes through gaining profit; therefore, to retain profit, we have to keep difference. In his narrative, Nick Carraway tries to underline the gap between Daisy in the present and Daisy in the past to avoid the restoration of the relationship between Gatsby and Daisy, which, as a result, prolongs our expectation for the fulfillment of the American Dream.

### はじめに

「愛はお金で買えない」という耳慣れた言葉から始めることにしよう。私たちは日常、愛をお金で表現したり、計ってみることに嫌悪を感じる。圧倒的な財力を背景にお金でも——愛ですら——買うことができるのだと人がうそぶくとき、私たちは戸惑い傷つきそして怒りを覚える。この紋切り型は、愛をお金で買うことはタブーであり、そのタブーを破ったものは罰せられることを私たちが内面化していることの証左である。このような愛とお金の相克は多くの小説でドラマとして描かれてきた。アメリカ文学に限って例を挙げてみよう。ヘンリー・ジェームズ (Henry James) の『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*, 1902) では、お金持ちの叔母の家に身を寄せている貧しくも美しいケイト (Kate Croy) は、当時は新興階級であったジャーナリストのマートン (Merton Densher) とお金がなくて結婚できない。そこでマートンに思いを寄せる大金持ちのミリー (Milly Theale) を利用しようと企てる。しかし、ミリーの死後、財産を手にしたケイトとマートンには後ろめたさが残り、二人の愛は以前とは同じではなくなってしまう。またニューヨークの上流階級と新興勢力の葛藤を多く描いてきたイーディス・ウォートン (Edith Wharton) は、『飲

楽の家』(*The House of Mirth*, 1905)において、結婚を愛でなくお金、すなわち上昇の機会と捉えたりリー・バート (Lily Bart) に破滅という結末を与えている。セオドア・ドライサー (Theodore Dreiser) の『シスター・キャリー』(*Sister Carrie*, 1900)においては、購買力で人が定義づけられる社会の中で、キャリー (Carrie Meeber) はより経済力のある男たちの間を渡り歩きながらも、最後には女優になり経済的にも登り詰める。しかしながら、小説の最後の場面では、キャリーが揺り椅子に一人座り、愛の不在が強調される。このように、愛を社会的・経済的な上昇と結びつけようとするときに、愛は捨て去られるか、不純なものとなり、その結果、登場人物は罰せられる。

愛をお金で買おうとする者、あるいは愛をお金に替えようとする者が、ことごとく罰せられるアメリカ小説群の中で、『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)は一見その流れに名を連ねているように見える。この小説でもお金は愛の障害として主人公の前に立ちだかるからだ。無産階級のジェイ・ギャツビー (Jay Gatsby) は大金持ちになってかつての恋人デイジー (Daisy Buchanan) の前に現れて、彼女の愛を取り戻そうとする。しかし、彼はデイジーをかばって殺されてしまうものの、彼の愛は報われることなく小説は終わる。ギャツビーの死は愛をお金で買おうとした罰なのだろうか。しかしながら、「愛はお金で買えない」ということを作品のモラルと解するのであれば、なぜ「お金で買えないものはない」ということをもっとも体現するデイジーの夫、トム・ブキャナン (Tom Buchanan) は罰せられないのであろうか。ニック・キャラウエイ (Nick Carraway) はギャツビーの死後、トムが何も変わらずに、またこれからも変わらないであろうことをわざわざ語っている。そもそもギャツビーとトムのデイジーに対する愛は、お金によって裏打ちされているという点で変わらないのだろうか。そして何よりもデイジーへの愛の表象である商品<sup>モノ</sup>があればほど魅力的に描かれているのはなぜだろうか、と次々に疑問が浮かんでくる。

これらの疑問は、『ギャツビー』において、お金と愛は対立するのかという問題に集約する。愛とお金の位相を把握するには、セルフメイド・マン (the self-made man) というモチーフを補助線とするのが有効であろう。ギャツビーがジミー・ギャッツ (Jimmy Gatz) だった頃、小説の裏表紙に書き付けた自己実現のためのスケジュールがはっきりと示すように (言うまでもなくベンジャミン・フランクリン [Benjamin Franklin] の十三徳のパロディーであるが)、小説全体を通してセルフ・エジュケーティッド (self-educated) なアメリカの伝統的なセルフメイド・マンのモチーフが散見している。先程、愛とお金の相克は小説にドラマを与えてきたと書いたが、その逆の例として、ベンジャミン・フランクリンの『フランクリン自伝』(*The Autobiography of Benjamin Franklin*) を挙げることができる。フランクリンにとってピューリタンの勤勉さは、結婚生活 (女性関係) の成功と経済的生活における成功の両方へ導くものであり、愛とお金はどちらかがどちらかに従属するのではなく、同次元で扱われている。<sup>1)</sup> 『ギャツビー』においてもまた、愛とお金は無邪気に寄り添う。ギャツビーは自分よりも上の階級に属するデイジーと結婚するた

<sup>1)</sup> 特に『フランクリン自伝』第5章はフランクリン自らの立身出世と結婚に至る道が平行して描かれている。(ベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』松本慎一、西川正身訳、岩波文庫 [岩波書店、1957年])

めに、無産階級から有産階級へ移行し、デイジーに相応しい男「ジェイ・ギャツビー」を自ら生み出しいく。そして稼いだ富はデイジーに示され、その富が彼女に対する愛の深さを証明するのである。デイジーへの愛はお金で表現されながらも、愛とお金の結びつきは奇跡的にも愛を純粹なものにしている。

そう考えると、『ギャツビー』のお金と愛をめぐる物語はアメリカ小説群にあって特異な位置を占めていると言うことができる。お金があればデイジーにふさわしい自分になり、デイジーの愛を取り戻せることができる、という思いは「愛はお金で買える」という様に言い換えられるかもしれない。しかしながら、トムが「愛はお金で買える」と言った場合、愛はお金に従属している（デイジーは言わばトロフィー・ワイフであり、トムの財力と地位の証として仕えている）。それに対して、ギャツビーの場合、フランクリン的なセルフメイドの文脈において考えると、愛とお金は対等な関係にあることが明らかになってくる。セルフメイドというギャツビーの夢に——その夢はアメリカン・ドリームと重ねられるが——愛とお金は仕えているのである。言い換えれば、愛とお金は等しくアメリカン・ドリームの様態なのである。

## 1. 神秘的なお金

『ギャツビー』において、男性たちの欲望の対象であるデイジーをお金と切り離して考えることは難しい。悪役であるトムにとってデイジーは自らの財力を示す財の一つであることが明白であるが、この小説のヒーローであるギャツビーにとっても、デイジーを手に入れるということは、デイジーに見合う財力を持っていること、そして成功と同義なのである。その意味で両者にとってデイジーはお金で表現される存在である。更に、この図式を強化するのが語り手ニックである。デイジーと親戚筋でありながらもオールドマネーというほどでもなく、ギャツビーほど貧しい出でもないニックは、デイジーに対しても、お金に対しても、その欲望は抑圧された形で表出される。ニックは即物的にお金と結びつけられたトムのなデイジーを志向しながらも、間接的に「声」をほめることしかできない。それゆえ、「デイジー／金」を手の届かない神秘的なものとして語るなのである。そうした神秘化は、ギャツビーのデイジーに対する愛と結びつき、彼はギャツビーの物語を語ることを通してデイジーに対する欲望の遂行を体験するのである。だからこそ、ニックの語りはトムとギャツビーの対比を一層明らかにし、ギャツビーのデイジーに対する欲望を——すなわちお金に対する欲望を——ロマンチックに仕立て上げるのである。

まずは小説全体でお金がニックによってどのように表象されているのか辿っていこう。次の場面は、ニックが証券業界に入り身を立てようと東部にやって来たばかりのことを回想するシーンである。

銀行業とクレジットと有価証券についての本をひと抱え買い込み、書棚に並べた。その赤と金色の背表紙は、鑄造されたばかりの新しい貨幣のようで、ミダス王やモルガンやマエケナスしか知らなかった光り輝く秘密を、もれなく解き明かしてくれるように見えた。<sup>2)</sup>

<sup>2)</sup> スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』村上春樹訳（中央公論新社、2006年）、15頁。

手に触れるものをすべて黄金にする力を持つギリシア神話のミダス王、証券業界でのアメリカン・ドリームの実現者J. P. モルガン、古代ローマの政治家マエケナス<sup>3)</sup>をニックは並列させる。金ぴか時代のアイコンであるモルガンを加えることで皮肉な色合いを付与しているものの、古今東西のお金持ちを並列させることにより、ここではやはりお金が喚起する生々しさや俗っぽさは弱まり、神秘的な様相を帯びるのである。また「鑄造されたばかりの新しい貨幣のようで (like new money from the mint)」という下りの“mint” (造幣局) も、即物的な響きと同時に、ぱりとした緑色の新札を想起させ、ニックのセルフ・エジュケイティッドな勤勉さと呼応するのである。<sup>4)</sup> ニックにとってお金に対する欲望は、魔法的な力を帯びた神秘的なものとして表現されるのである。

ニックの目を通して観察されるお金の神秘性は、トムの「お金/デージー」の表裏一体となった欲望に反射して、デージーを光まばゆいものにしてその神秘性を一層高める役割をする。ニックはイースト・エッグ (East Egg) のトムの邸宅に入った時からデージーを形容するのに太陽の光のイメージを多用している。この輝きはお金の換喩としてデージーと貨幣の類推を強化する。更に興味深いのが、ニック自身はギャツビーに指摘されるまで、デージーとお金の類推を抑圧していることである。

「彼女の声には何か無分別なものがあるね」と僕 [ニック] は指摘した。「あの声には——」、そのあとの言葉を僕はためらった。

「彼女の声にはぎっしり金が詰まっている」とギャツビーはあっさりと言った。

まさにそのとおりで。でも彼に言われるまでそのことに思い至らなかった。そう、そこには金が詰まっていた。蠱惑がそこから尽きることなく立ち上り、そして降りていくのだ。その心地よいちりんちりんという音、シンバルの歌……純白の宮殿の高楼には、王様の娘にして黄金色の少女……<sup>5)</sup>

ニックはこの場面に先立ち、光のイメージに加えて、繰り返しデージーの声の魅力に触れている。そしてここに来て初めて、それまでニックが持たざる者であるゆえに控えめに憧れていた二つのもの——すなわちデージーとお金——の正体が同一であったことをギャツビーに言い当てられる。ギャツビーの直裁的な物言いは、ニックによってそのまま引き受けられ、シンバルやベルの甲高い金属音になぞられて、コインの「ちりんちりん」という物理的な音でお金の即物性が強化される一方、「シンバル」、「宮殿」とロマンチックな方向にイメージが重ねられ、最終的にはデージーとお金が美しく結びついた「黄金色の少女」というイメージに到達するのである。

この場面が典型的なように、お金に対する欲望に通常は付随する生々しさや俗っぽさ

<sup>3)</sup> マエケナスはローマ皇帝アウグストゥスと親交を結び、「親譲りの財産のほかに、さらに富を付け加えることができたらしい」人物で文人のパトロンをしていた。(『マエケナス』『ブリタニカ国際大百科事典』電子辞書対応小項目版、[ブリタニカ・ジャパン、2004年])

<sup>4)</sup> もちろん、ここでも皮肉な色彩が皆無なわけではない。このセルフ・エジュケイティッドな仕草は、ジェイ・ギャツツのフランクリンのパロディー (311-12頁) と呼応させると、ニックの滑稽さとなって戻ってくる。

<sup>5)</sup> フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』218-19頁。

が、この小説でほとんど脱色されている。ニックの語るギャツビーの物語において、ギャツビーの金に対する欲望は、デイジーを取り戻す行為と結びつく。その結合はギャツビーの金に対する欲望を卑しい成金的なものから、イノセントで慎ましやかなものに変容させる。例えば、ギャツビーがパーティを開く真意が、デイジーに自分が富を築いたのを見てもらう為だということニックが知ったとき、「その願いのあまりのつつましさに、僕は言葉を失ってしまった」<sup>6)</sup>と、ギャツビーが費やした金額の莫大さに比して、求める見返りがあまりにも控えめなことに驚くのである。この時点を境にニックの語りの上では、ギャツビーの上品なお金の使い方・財の成し方は、高潔なものへと転換するのである。

## 2. 金色の輝きと兌換紙幣

それではデイジーがお金と結びついたときに、ギャツビーの欲望がよりロマンチックな夢になるのは何故だろうか。『ギャツビー』において、直接的にも比喩的にもお金への言及が満ち溢れている。が、そのお金の形態が実は一つではないことに答えを求められるのではないか。トムにとってデイジーは、結婚式の前に送った35万ドルの真珠の首飾りが象徴するように財宝であり、貨幣制度の比喩の中では兌換紙幣を支える金なのである。先述したとおり、語り手ニックはイースト・エッグのトムの家にいるデイジー（特にギャツビーと再会する以前の彼女）に対して、まばゆい光のイメージを多用するのも、金という比喩ゆえのことである。そうすると、トムは金に裏書きされた兌換紙幣と言うことになる。兌換紙幣は当然ながら不換紙幣より、金という現物に裏打ちされているので信用が厚く、何世代にもわたって財を成し富を蓄積してきたオールドマネーを類推させる。トムとデイジーの結婚は、デイジーと金の類推を更に強化するのである。

しかしながら、金本位制において皮肉な顛倒是不可避に起こる。本来、金の方が本物であり、兌換紙幣の方はあくまでもその代理に過ぎない。だが流通という市場の要請に従うとき、世の中を流通するのは金ではなく兌換紙幣なのである。金本位制は、誰もが実物の金を目にするこなしに、ただどこかにある金をイメージし信じることによって成立するものであり、金はいわば隠されたアイコンである。金はどこかの蔵の底で神々しい光を誰にも見せることなく輝きを放ちながら死蔵されているのである。その一方で、兌換紙幣は不在の金のオーラをまといながら、自身を身軽に流通させていくことができる。

『ギャツビー』において、金が死蔵されているのがイースト・エッグのブキャナン邸であり、デイジーが描写される場所もほとんど家の中なのである。トムがよその女性たちと出歩いているときも、彼女は一人家に残される。金が独立して循環することが許されないように、デイジーも一人で出歩くことは許されないのである。イースト・エッグ以前の結婚生活において、行く先々で彼女は人気者であった一方で、はめをはずすこともなく、ギャツビーとの交際を再開するまでは、家の中でジョーダンと所在無さげにただずんでいる以外、彼女の社交生活の描写は一切ない。ニックとデイジーがイースト・エッグの家で最初に再会した場面で、デイジーは「私ね、幸福すぎて身体が、ま、マヒしちゃった」<sup>7)</sup>と、ぎこちなくもどこか芝居がかった言葉を発する。「幸せで」と付け加えられているものの、

<sup>6)</sup> 前掲書、147頁。

<sup>7)</sup> 前掲書、23頁。

麻痺状態——身体的にも思想的にも停止状態にあると告白している。このデイジーのセリフは、のちにトムが浮気しているらしいことや、デイジーがあまり幸せではないことなど、一連の事情をニックが察するにつれて皮肉に変わる。ニックは「デイジーのとるべき道は、どう考えても、子供を両腕に抱きかかえてすぐにもあの家を飛び出すことだ」<sup>8)</sup>と、義憤にかられるが<sup>9)</sup>、しかしながら、ブキャナン家に嫁いだデイジーは、蔵に眠る金であり、あくまでトムの影であるから、外の世界流通することは許されず、家を出るという選択肢はこの時点ではあり得ないのである。

トムにとってデイジーが死蔵されるべき金であることは、トムの浮気相手であるマートル (Myrtle Wilson) と比較するとより明らかになる。ニックはマートルの肉感的な魅力のみとめながらも、「顔にはとくべつな美のしや輝きはなかった」<sup>10)</sup>と、わざわざ輝き——金の換喩——がないと断りを入れる。つまり、デイジーのみ金の比喩が付与されていることがわかるのだ。トムがマートルに犬を買い与えるエピソードも、マートルが決して金ではないことを再確認させるものである。そこでマートルは売り主に犬が雄なのか雌なのか尋ねる。そうすると、トムは「これは雌さ」、「ほら、金だ。これであと十匹ばかり犬を仕入れてくるんだな」<sup>11)</sup>と断言する。「雌」はトムがこれまでに何人も作ってきた愛人であり、十把一絡げに買うことができる代替可能な商品であることを——そして、マートルもその一人であることを暗示しているのだ。

### 3. 緑色の灯火と不換紙幣

その一方で、ギャツビーにとってデイジーは貨幣そのものである。しばしばギャツビーがウェスト・エッグ (West Egg) の家の庭からイースト・エッグを眺め、手を伸ばして掴もうとしている「緑の灯火 (single green light)」<sup>12)</sup>であり、この緑の灯火はギャツビーにとって一義的にはデイジーである。そして、緑はアメリカ合衆国紙幣の色であり、貨幣の換喩なのである。この「緑の灯火」は、小説を通して反復され、ギャツビーの死んだ後もなおも灯り続ける。小説の最後には、ニックの目を通して、「緑の灯火 [...] 陶醉に満ちた未来 (the green light, the orgasmic future)」<sup>13)</sup>とアメリカの行く末と重ね合わされる。「緑の灯火」がアメリカ全体の夢を内包する力を持つのは、「緑の灯火」すなわち「貨幣」が、その性質上あらゆるモノと交換可能性を有しているからであり、いわば全能の夢 = 可能性であるからである。<sup>14)</sup>

ギャツビーにとって、「緑の灯火」で象徴されるデイジーに対する欲望は、デイジーが他者の欲望を映し出せば映し出すほど高まるものである。ギャツビーが将校時代に初めてルイヴィルのデイジーの家に行った時、彼はその豊かさに圧倒され、そしてほかの男たちの

8) 前掲書、44-45頁。

9) このニックの考えは、皮肉なことにすぐ後の2章でトムが浮気相手のマートルに対して繰り返される。

10) 前掲書、53頁。

11) 前掲書、58頁。

12) 前掲書、46頁。

13) 前掲書、325頁。

14) 貨幣の持つあらゆるモノとの交換可能性については、岩井克人『貨幣論』ちくま学芸文庫 (筑摩書房、1998年) 第2章を参照。

欲望の残滓をみとめる。「数多くの男たちがこれまでにデイジーに夢中になったという事実も、彼の心をそそった。そのことで、彼にとってのデイジーの価値はますます高いものになった」<sup>15)</sup> またデイジーの気持ちを確かめた直後、その戸惑いと驚きを、ギャツビーはニックに次のように語る。「私は野心なんぞ放ったらかしにして、日ごとに深く恋に落ちていった。そしてあるとき、もうかまうものかと腹を決めた。偉業を達成することにどんな意味があるだろう。自分がこれから成そうと目論んでいることを、彼女に語っている方が遙かに楽しいというのに」<sup>16)</sup> デイジーは他者の欲望を引き受ける。他者の欲望をいくらでも投影できるのは、デイジーの貨幣性ゆえである。またギャツビーの「野心」、すなわちまだ実現されていない可能性を、彼女に語ることが「夢」の実現を凌ぐかもしれないことは、デイジーの貨幣性がギャツビーの色とりどりの可能性をいつまでも担保してくれるからである。

かつてデイジーが持っていた貨幣性、すなわち無限の交換可能性は、5年を経た後、逆にギャツビーからデイジーに再提示される。それは、彼女の目を引く為に行う過剰な商品の消費という形で表現される。その象徴がウェスト・エッグの家であり、煌々と輝く人工的なパーティの灯、オレンジとレモンの山、あるいは彼女にふさわしい教養のある男として振る舞うために必要な頁の切られていない「本物」の本。<sup>17)</sup> ウェスト・エッグのギャツビー邸の隅々までも、すべてギャツビーのデイジーに対する欲望の具体的な姿であり、デイジーの化身である。ギャツビーがデイジーに初めて邸宅を見せたとき、シャツの山から一枚一枚シャツをほおって見せる場面がある。

ギャツビーは一山のシャツを手にとって、それを僕らの前にひとつひとつ投げていった。薄いリネンのシャツ、分厚いシルクのシャツ、細やかなフランネルのシャツ、きれいに畳まれていたそれらのシャツは、投げられるとほどけて、テーブルの上に色とりどりに乱れた。僕らはその光景に見とれていると、彼は更にたくさんのシャツを放出し、その柔らかく豊かな堆積<sup>たいせき</sup>は、どんどん高さを増していった。縞のシャツ、渦巻き模様のシャツ、格子柄のシャツ。珊瑚色の、アップル・グリーン、ラヴェンダーの、淡いオレンジのシャツ。どれにもインディアン・ブルーのモノグラムがついている。<sup>18)</sup>

布地の肌理<sup>きめ</sup>や素材、色や柄を一つ一つ提示したシャツは無一文の若者だった男が、デイジーへの欲望を具現化するために買った商品<sup>商品</sup>の一つ一つであり、溢れる商品<sup>商品</sup>のパラエティーはトムの送った35万ドルの真珠の首飾りと対照的である。5年間、トムを陰から支えるためだけに塩漬<sup>しほ</sup>けにされていたデイジーは、「なんて美しいシャツでしょう」<sup>19)</sup> 「だって私——こんなにも素敵<sup>素敵</sup>なシャツを、今まで一度も目にしたことがなかった」<sup>20)</sup> とシャツの

15) フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』268頁。

16) 前掲書、271頁。

17) ここで本のページが切られていないということが重要である。「本物」の本であることは、その使用価値を評価することを意味していない。ただ交換可能性を示すことができれば、役割は果たしたと言える。むしろ、それを本来の用途、すなわち読書することは目的ではないことが強調されていると言えよう。

18) 前掲書、171頁。

19) 前掲書、171頁。

20) 前掲書、172頁。

一枚一枚の美しさに涙を流すのである。

岩井克人は貨幣について、「貨幣が貨幣であり続けるためには、それは流通して、ほかの商品との等価関係をたえず更新していかなければならない」<sup>21)</sup>と述べている。すなわち、貨幣にとって流通（循環性）とは、命なのである。紙幣の持つ無限の交換可能性という性質は、兌換紙幣を支える金とは違い、循環されればされるほど貨幣としての本質を発揮するのである。つまり、デイジーの場合、多くの欲望になぞらえられるほどにその魅力が発揮されると言うて良い。

実際にデイジーはギャツビーによって自らの無限の（交換）可能性を示されたこの日之境に、蔵に眠る金ではなく循環する不換紙幣のように動きを取り戻すのである。ギャツビーとデイジーの再会の直後、夏の昼下がりにトム、ギャツビー、ニック、ジョーダン（Jordan Baker）がブキャナン邸に集まる。何をして過ごそうかと相談していると、デイジーはそれまでとは違って外へ行こうと主張する。先ほど引用したニックとデイジーの再会シーンと比較すると、デイジーの変化は際立っている。しかしながら、小説はデイジー循環性の獲得を悲劇の引き金と設定する。デイジーの主張に従って、4人はマンハッタンのプラザホテルへ移動するが、そこで彼女を待ち受けていたのは、ギャツビーとトムの修羅場であり、彼女は板挟みになってしまう。更に悪いことには、帰り道にデイジーとギャツビーの乗った自動車は「灰の谷（a valley of ashes）」でトムの愛人マートルをひき殺してしまう。このときにハンドルを握っていたのが、デイジーであることは重要だ。デイジーが動き始めたことがマートルの死を引き起こしたことは、それまで交換可能性を享受してきた兌換紙幣としてのトムと（それを裏打ちする）金という実体と影の関係を転覆させる契機にもなり得たからだ。トムは交換可能性を享受しながら世界を循環してきたのであるが、その交換可能性の一つであるがマートル、影であったはずのデイジーが動き始めたことによって消されたことは、トムとデイジーの関係を転覆する可能性を孕んだ出来事でもあったのだ。

#### 4. セルフメイドと利潤

今度はギャツビーを中心に貨幣のアナロジーを考えてみよう。これまでデイジーを中心とした貨幣の比喩から『ギャツビー』における愛とお金の位相を検討してきた。ギャツビーのデイジーに対する愛は、彼が獲得した富が持つ購買力——溢れるばかりの商品——で表現され、不換紙幣の持つ無限の交換可能性をデイジーに保証することによって表されることを確認してきた。ギャツビーの富がデイジーの化身だと言えるとすると、翻ってその富はギャツビー自身でもあると言えるのではないか。ギャツビーが富を獲得する軌跡は、無一文の田舎者ジミー・ギャッツがデイジーの化身の一つとも言えるウエスト・エッグの豪邸に住むギャツビーへと変貌する軌跡でもある。<sup>22)</sup>「ロング・アイランドのウエスト・エッグ在住のジェイ・ギャツビーは、彼自身のプラトンの純粹観念の中から生まれ出た像なのだ」<sup>23)</sup>とニックは述べるが、富こそがこのウエスト・エッグ在住のジェイ・ギャツビ

<sup>21)</sup> 岩井克人「ヴェニスの商人の資本論」『ヴェニスの商人の資本論』ちくま学芸文庫（筑摩書房、1992年）、55頁。

<sup>22)</sup> 名前自体はダン・コーディーと出会ったときに、ジミー・ギャッツからギャツビーへ変えている。

<sup>23)</sup> フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』181頁。



一を作り上げたに他ならない。スコット・A・サンデー (Scott A. Sandage) によれば、「わずかな例外はあるものの、アメリカにおいて唯一正当とみなされるのは、資本主義者としてのアイデンティティである」。<sup>24)</sup> その例証の一つとして、「failure」という単語が「南北戦争前にはこの言葉が一般的には『破産』を意味していたが、[...]それが『欠陥のある人』をさすようになった...」ことを挙げる。<sup>25)</sup> また別の例証として、ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) の『草の葉』第一版 (*Leaves of Grass*, 1855) 所収の「仕事を讃える歌」 (“A Song for Occupations”) を引用し、「無数の商売や道具をずらずら並べ上げたこの詩は、『身体とアイデンティティの奇妙な感覚』に仕事がいかなる影響を及ぼすか、思いをめぐらしている。[...]『粗野な事物と姿の見えぬ魂が一体になっている』。いいかえれば、商業的民主主義において、商品とアイデンティティは融合している」と指摘している。<sup>26)</sup> つまり、アメリカのセルフメイドの伝統の中では、富が（より正確に言えば、富を稼ぐ過程そのものが）アイデンティティを規定するということである。ギャツビーについて言うならば、彼はお金を稼ぐ過程こそがジェイ・ギャツビーを生み出す過程と言えるのだ。

ギャツビーと貨幣（お金）の類推を考える上で、ニックが神秘化して語ったように彼が無から生まれたわけではなく、無一文のジミー・ギャッツという人間から生まれたことは重要である。なぜならば、資本を持たざる者が富を増やす場合には、まさに裸一貫、自分自身を資本とするほかないからである。ギャツビーのような資本を持たない人間にとって「信用」こそ唯一の資本なのである。<sup>27)</sup> また、サンデーは、19世紀初頭から半ばにおいて、アメリカの商人たちが、セルフメイド・マンの象徴する美徳に後押しされ、強迫的に投資を繰り返す様が描かれている。それに伴い、現金取引だけでは追いつかずに「信用取引」という商習慣が定着するが、この信用取引が連鎖的に破産者を生み出すのだと書かれている。<sup>28)</sup> 結果として、セルフメイド・マンの美徳は負け組を生み出すという構造的な瑕疵をも内包していることが窺える。このことはまた5章でニックの語りと併せて詳しく論じるつもりである。

資本を増やすには言うまでもなく利潤を生み出す必要がある。先程の岩井は貨幣の流通と利潤の関係を以下のように説明する。

では、利潤とは一体どこから生み出されてくるものなのであろうか。

もちろん、利潤は無からは生まれぬ。それは、かならず貨幣とモノとの交換、すなわち売りと買いを通して生み出されてくるものである。…おたがいに異なったふたつの価値体系のあいだを媒介して、一方で相対的に安いものを買ひ、他方で相対的に高いものを売る…利潤とは、すなわち、差異から生まれる。<sup>29)</sup>

<sup>24)</sup> スコット・A・サンデー 『「負け組」のアメリカ史——アメリカン・ドリームを支えた失敗者たち』 鈴木淑美訳 (青土社、2007年)、13頁。

<sup>25)</sup> 前掲書、10頁。

<sup>26)</sup> 前掲書、152-53頁。

<sup>27)</sup> サンデーによれば、「19世紀のアメリカ人は、支払い能力と自我こそが投機対象であると理解していた」(前掲書40頁)。

<sup>28)</sup> 前掲書、1-3章; 宮本文「スコット・A・サンデー 『「負け組」のアメリカ史——アメリカン・ドリームを支えた失敗者たち (青土社、2007年)』 『図書新聞』 2007年4月7日。

<sup>29)</sup> 岩井「ヴェニス商人」57-8頁。

差異が利潤を生むもっとも典型的な例として、岩井は遠隔地交易を挙げているが、このことは重商主義時代と大航海時代が表裏一体だったことを考えれば理解することは容易い。かつて差異は物理的な距離であったのだ。また、アメリカの文脈にあてはめれば、西漸運動やゴールド・ラッシュ、またベンジャミン・フランクリンがボストンからフィラデルフィア、ニューヨーク、ヨーロッパへと移動するたびに社会的・経済的に上昇していったことがすぐに思いつくだろう。移動は富を得る機会であり、またアメリカン・ドリーム成功者にとっては富の蓄積の軌跡だと言えるのだ。

このように考えると、『ギャツビー』が愛とお金の物語であると同時に「移動」の物語でもあることが必然だということに気づく。小説に背景として通底するのが中西部と東部の差異である。ニック、ギャツビー、デイジー、トム、そしてペイカーまで主要登場人物は中西部出身であり、彼らは移動を繰り返し、東部のニューヨークに辿り着く。それに対してニューヨークの地理に内在する差異が主旋律として前景化される。小説内部に差異を生み出すべく、とにかく登場人物たちは動く。ニックとギャツビーは第一次世界大戦に従軍する。戦争は、ギャツビーがまさにその典型であったように無一文の若者を社交界の華と変える。ニックは親族会議の結果、新たな立身出世のルートであるニューヨークへと送り出される。また、トムとデイジーもシカゴへヨーロッパへと動き続ける理由がはっきりと示されていないものの、灰の谷の住人であるウィルソン夫妻と対比すれば移動が富の問題であることがわかるであろう。彼らは灰の谷に留まり、何も生み出すことなく、亭主は生きていくのかわからないように暮らし、マートルはくすぶっているのである。

移動による差異が利潤を生むとすれば、登場人物の中で一番動きが激しいのがギャツビーであることも納得がいくだろう。オールドマネーと新興階級の差は、後者は端的に言って財を成すスピードが速いのである。コーディーとのやや時代がかった出会いと世界を巡る大航海は、差異が利潤を生む典型例として岩井が挙げる大航海時代にぴったりとあてはまる。また戦後の——ニックに比べても遥かに長い——遠回り、このオデュッセイア的な周回道でのエピソードは、同時にこの富の獲得がいかに怪しげな方法によるものかを伝えている。一文無しの彼にとって自分自身という資本を流通させ、差異を生み出すことでしか、利潤を得て財をなすことはできないのだ。しかもデイジーを取り戻す為に、財を成すスピードを上げなければならないギャツビーは、移動のスピードと規模を上げる必要がある。だからこそ、ウエスト・エッグの邸宅に不吉に割り込んでくる電話も、フィラデルフィアからだったりデトロイトからだったり遠隔地からなのである。

ギャツビーの財の成し方がどこか怪し気で且つ危ういのは、比喩的な意味でも、文字通りの意味でも、彼が「信用」で取引しているからである。特に無一文で急激に財を成さなければいけないギャツビーにとっては、より身軽で——すなわち裏打ちがなされていないハイリスクな金融商品を扱わなければならない。さらにスピードを加速させるためには、小説の中でおぼろげに語られる裏稼業に手を染めなければならない。デイジーとの仲が壊れてしまうのは、プラザホテルでトムが彼女の前でこのことを指摘したからである。いわばスピードの出し過ぎでギャツビーはデイジーとの失われた過去を取り戻すという夢に破れてしまうのだ。

## 5. ニックの語りとアメリカの夢

ギャツビーの視点から、フランクリン的なセルフメイド・マンのモチーフを補助線にして、デイジーとお金の間に比喩を結ぶことができるのは、デイジーとの失われた過去を取り戻すというギャツビーの夢がアメリカン・ドリームと軌を一にしているからである。加えて、差異という要素を考えると、語り手ニックがギャツビーの物語に意識的に差異を組み入れることによって、ギャツビーの夢をアメリカの夢に昇華させて、更にアメリカの夢を永遠に支えるメカニズムを生み出しているのがわかる。

ニックとギャツビーの、ウェスト・エッグから灰の谷を経てマンハッタンに至るドライブは、移動によって差異を可視化する。

巨大な橋を渡るとき、<sup>はり</sup>梁を抜ける太陽の光が、進んでいく車の上にちかちかと絶え間なく光った。そして河の向こう側に、純白の大きな山となり、砂糖の塊となって、都市にぽっかりと浮かび上がる。嗅覚を持たぬ金の生み出す願望によって築き上げられたものがそこにある。クイーンズボロ橋から街を俯瞰するとき、それは常に初見の光景として、世界のすべての神秘とすべての美しさを請け合ってくれる息を呑むような最初の約束として、僕らの目に映じるのだ。<sup>30)</sup>

車のフロントガラス越しにクイーンズ側からのぞむマンハッタンの描写は、はっとするほど神々しい。先程、ニックがデイジーとお金の描写に光を多用することによって両者の神秘性を高め、両者の間に類推の関係を結ばせていることを確認したが、ここでもマンハッタンの姿は「純白の大きな山 [...] 砂糖の塊 (white heaps and sugar lumps)」として遠く光の中にたたずんでいる。砂糖の持つ白さ、軽さ、甘さ、華奢さも相まって、マンハッタンの姿はニックがブキャナン邸で初めて目にした、白いドレスを着てほとんど質量を持たないかのように漂っているデイジーの姿に重なる。ギャツビーの夢であるデイジーは、ここではニックによって、アメリカの夢、マンハッタンの姿に読み替えられるのである。

マンハッタンの姿に、ニックは遠隔地交易によって利潤を求めアメリカにやって来たオランダ人の視線を見いだす。この水辺を挟んで反対側から眺める視線は、ギャツビーの「緑の灯火」を眺める視線の変奏——すなわちデイジーを求める視線——であり、また小説の最後に描かれる「オランダ人の船乗りたち」<sup>31)</sup>の視線に重なる。またそれと対になって、「緑の灯火」に手を差し伸べるギャツビーの仕草は、最後にはアメリカの夢をつかもうとする「明日はもっと速く走ろう。両腕をもっと先まで差し出そう」<sup>32)</sup>という仕草に反復されるのである。これらは単に仕草を反復しているだけではなく、夢に手を差し伸べようとしている者と、差し伸ばされることを光の中で待つ夢の住人との間にある距離をも反復しているのである。マンハッタンへのドライブの場面にはクイーンズボロ橋という差異／距離がニックによってしっかりと差し挟まれており、「緑の灯火」とギャツビーの間にはイースト・エッグとウェスト・エッグの双子の地形を挟む入り江によって距離が確保さ

<sup>30)</sup> 前掲書、128-29頁。

<sup>31)</sup> 前掲書、324頁。

<sup>32)</sup> 前掲書、325頁。

れている。また重要なのは、「緑に灯火」と「黄金の輝き」の本来違うはずの二つの比喩が、遠くを眺める視線、手を差し伸べる仕草を媒介として、ニックによって重ねられているところである。つまりニックは、反復という行為によって両者を同一のものであるように錯覚を誘いながらも、そのずれを差異として語りに取り込むのである。<sup>33)</sup>

差異／距離を搾取して利潤を生むのがアメリカン・ドリームの根底を支えるメカニズムであるならば、ここにアメリカン・ドリームは最大のジレンマを抱えこむことになる。差異を保ちつづけなければいけないというジレンマを。差異が利潤を生み出し、利潤が差異を消滅させるという一続きの運動は、アメリカン・ドリームの原型ともいべきフロンティアが辿った道筋と一致する。人は利潤を求めてフロンティアを押し上げていった。その結果、フロンティアは消滅してしまう。このことはアメリカン・ドリームを根幹から揺るがす事実であったはずである。オランダ人がマンハッタンを眺める視線の下に伸びている「距離」を保ち続けなければ利潤は生まれず、アメリカン・ドリームというメカニズムはたちまち機能しなくなる。岩井によれば、移動が差異を搾取して利潤を生んでいく一方で、「利潤が差異から生まれるのならば、差異は利潤によって死んでいく。すなわち、利潤の存在は、遠隔地交易の規模を拡大し、商業資本主義の利潤の源泉である地域間の価値の価格の差異を縮めてしまう」。<sup>34)</sup> そうなると、内部に差異を生み出しそこから利潤を得ようとなるのは必然である。架空の双子の地形、ウェスト・エッグとイースト・エッグは、同じお金持ちのコミュニティーでありながらも、カテゴリーを細分化——すなわち、オールドマネーとニューリッチに細分化——することによって差異を生み出す。しかしながら、遅かれ早かれその差異が搾取し尽くされて消滅してしまうことは皆知っている。

それでは差異を差異のまま保つにはどうすればいいのか——それには、夢の実現を永遠に引き延ばせば良いのだと簡単に言ってみよう。そうなると、欲望を実現することよりも、欲望する主体とその対象の間の差異を保つことが至上命令になり、顛倒がここに生まれる。すなわち、アメリカン・ドリームは実現不可能性によって、更に言えば失敗という結末に支えられなければいけないという逆説を内包することになる。「緑の灯火」に手が届きそうで手が届かない——この永遠に差異を引き延ばす仕草こそが、物理的な利潤はもちろん期待感やときめきといった心理的な利潤を担保し続けるのだ。

このことに一番自覚的であったのは語り手のニックだ。第一次世界大戦後、ヨーロッパから帰還したニックは「中西部」がもはや「世界の心温かき中心 ([t]he warm center of the world)」<sup>35)</sup>ではなくなったと書いていることから、彼がギャツビーに出会うにあたり、差異の消滅を経験的に知っていたと言える。だからこそ、彼の語りは欲望が実現する手前の段階で、何とか押し留めておこうとする企てでもあったのだ。ニックにとって、ギャツビーが遠くから眺める「緑の灯火」、すなわち過去のデイジーこそが、今そこにいる生身のデイジーよりも欲望を惹起させるものなのだ。ニックは差異が利潤を生むと同時に搾取

<sup>33)</sup> 太陽の光が差し込む中、白く浮かぶマンハッタンの姿は、ブキャナン邸のデイジーの姿と重なりと論じたが、両者は共に他者の夢のために——前者は入植者たちによって、後者はトムによって——搾取される存在だと言える。

<sup>34)</sup> 岩井「ヴェニス商人」67頁。

<sup>35)</sup> フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』13頁。

され消滅してしまうことを熟知して、巧みに「緑の灯火」が象徴するデイジーと生身のデイジーを引き離して距離を保とうとしている。

「霧さえ出ていなければ、湾の向かいにあなたのうちが見えるんだが」とギャツビーが言った。「お宅の棧橋の先端には、いつも夜通し緑色の明かりがついているね」

デイジーはふいに、彼の腕に自分の腕をからめた。しかしギャツビーは、自分が口にした言葉に深く囚われているようだった。その灯火の持っていた壮大な意味合いが、今ではあとかたものなく消滅したことに、自分でもおそらく思い当たったのだろう。デイジーと彼を隔てていた大きな距離に比べれば、その灯火は彼女のすぐ近くに——彼女に触れるくらい間近に——あるものとして見えた。月に対する星ほどに近いものに思えたのだ。しかし今ではもう棧橋の先端についた、何の変哲もない緑色の灯火に戻っていた。彼が魅了されていた事物が、またひとつ数を減らしたわけだ。<sup>36)</sup>

デイジーが彼の夢に追いつけないという事態は、その午後にだって幾度も生じたに違いない。しかしそのことでデイジーを責めるのは酷というものだ。結局のところ、彼の幻想の持つ活力があまりにも並み外れたものだったのだ。それはデイジーを既に凌駕<sup>りょうが</sup>していたし、あらゆるものを凌駕してしまっていた。<sup>37)</sup>

一番目の引用では、ギャツビーの夢の中にいる過去のデイジーと現実のデイジーに（この場合、時間的な）差異があるからこそ、デイジーには意味があり、ギャツビーの夢を惹起させる力があるのだと、夢の舞台裏をニックは明かしている。続いて二番目の引用では、ニックは、生身のデイジーと、ギャツビーの夢の中に住んでいるデイジーを、全く別のものとして語ることによって、ギャツビーの夢を実現不可能なものとして語り、あらかじめ失敗に終わるように導いている。

但し、ニックが全知の語り手のように振る舞い、ギャツビーの思いを全て熟知しているかの如く語っているが、実際にギャツビーが現実のデイジーに幻滅したということを経験、ニックに語るエピソードもなければ、ギャツビーが明言している箇所はない。むしろ、ニックのデイジーに対する欲望の在り方と一致するのだ。ニックの欲望は生身のデイジーそのものではなく、「声」に対するフェティシズムとして表されている。ニックは生身のデイジーを貶める一方で、彼女の「声」を現実が追いつかない場所へと崇め奉り、両者の間に差異を保ち続けようとする。<sup>38)</sup> ニックの語りは、言うなれば、ギャツビーの夢——ひいてはアメリカの夢に、実現不可能という瑕疵を埋め込む作業であるのだ。

#### むすび ポートを早く漕ぎすぎたギャツビー

小説を閉じる最後のニックの言葉は、決して解消されることのない時間的な差異を、現

<sup>36)</sup> 前掲書、172頁。

<sup>37)</sup> 前掲書、177-8頁。

<sup>38)</sup> 「なぜならその声だけは、どれほどの夢をもってしても凌駕することのできない特別なものであったからだ。その声はまさしく不死の歌だった」(前掲書、178頁)。

疵としてアメリカの夢に埋め込む。

だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボートのように、絶え間なく過去へと押し流されながらも。<sup>39)</sup>

過去へ流されながらも「前へ」——すなわち未来へボートを漕ぐという構図は、過去のデイジーという再現不可能なものを希求する仕草の陽画なのである。しかしながら、過去が再現不可能だと一体、誰が決めたというのだろうか。

「彼女にあまり多くを要求しない方がいいんじゃないかな」と僕 [ニック] は思い切って言ってみた。「過去を再現することなんてできないんだから」

「過去を再現できないって!」、いったい何を言うんだという風に彼 [ギャツビー] は叫んだ。「すべてを昔のままに戻してみせるさ」と彼は言い、決意を込めて頷いた。<sup>40)</sup>

「過去は再現できる」というギャツビーの思いこみの強さは、しばしばこの小説で、ギャツビーの過剰さが質に転化する瞬間——「グレート・ギャツビー」の「グレート」が滑稽さから偉大さの形容に転化する瞬間——の一つと言える。デイジーの目を引くためだけの過剰な消費、財をなすスピードの過剰な速さ、その圧倒的な過剰さにニックは打たれ、ギャツビーに傾いていくのがこの小説の大枠である。ここでも「過去は再現できる」と言い切るギャツビーの滑稽さは、ある種の偉大さに転化している。<sup>41)</sup>

過剰なまでの規模と速度で、あらゆる差異を搾取し、利潤を得て、ウエスト・エッグの豪邸に住む「ジェイ・ギャツビー」へと自らをセルフメイドしたギャツビーの周りでは、確かに差異が消滅しつつある。ウエスト・エッグとイースト・エッグの差異も、ギャツビーのパーティのリストに、イースト・エッグの住人が名を連ねていることからわかるように、実際には消滅しかかっているのだ。そして今度は、ニックが巧みなレトリックによって分け隔てていた生身のデイジーと過去のデイジーの差異は、「過去は再現できる」というギャツビーの思いの過剰さによって消滅しようとしている。ニックが実現不可能という瑕疵を埋め込み、期待感を引き延ばし、保持しようとしたアメリカン・ドリームの、その約束事を破って、ギャツビーは過去へ押し戻そうとする流れを遙かに凌ぐスピードでボートを漕いだ。あと少しのところまで「緑の灯火」に手が届きそうであったのだ。

結局、ギャツビーの死によって、「緑の灯火」は実現不可能という瑕疵を内包したアメリカン・ドリームに回収される。そして「緑の灯火」は、ニックにとって期待感を永遠に喚起し続ける装置として光り続けるのである。

<sup>39)</sup> 前掲書、325-26頁。

<sup>40)</sup> 前掲書、202頁。

<sup>41)</sup> ここでニックは過去を能弁に語るギャツビーの「感傷性に辟易しながらも」何かを思い出しかける。「何か」は「捉えがたい韻律、失われた言葉の断片」と置き換えられ、それが重要で意味があるという期待感が高められる。しかしながら、結局、それは「意味のつてを失い」、ニックによって永遠に消されてしまうのである（前掲書、204頁）。